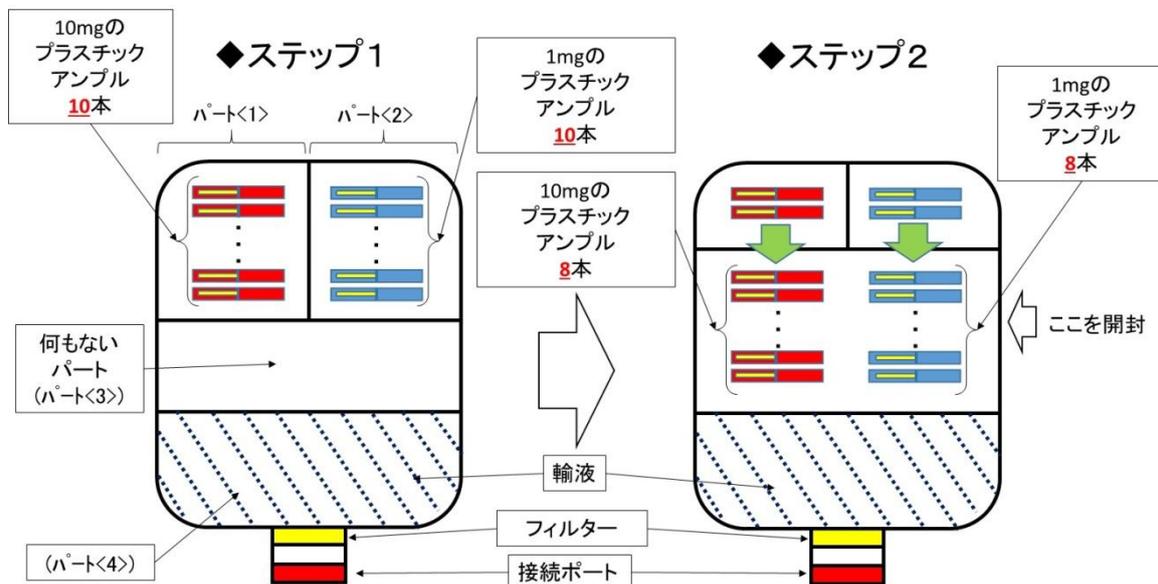


4. デザイン例

(2) デザイン例②：操作方法

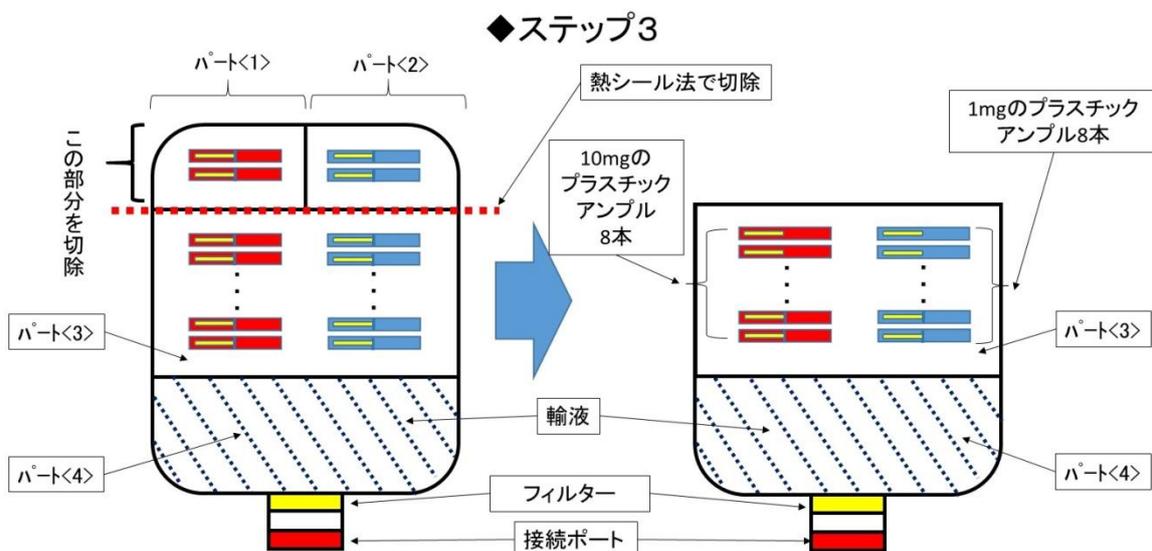
- ✓ デザイン例②は、余剰薬（残薬）が廃棄されることを想定しています。構造は、輸液バッグが4つの部屋に分かれていて、そのうちの2つに、10mgのアンプル10本と1mgのアンプル10本がそれぞれ存在します。つまり、最大110mgの薬剤を投与することが可能なキットになります（図表3）。

図表3：デザイン例②（ステップ1と2）



- ✓ 例えば、88mgを投与する場合、10本ある10mgのアンプルのうち8本と10本ある1mgのアンプルのうち8本を選びます（ステップ1）。次にアンプルが入ったパート（パート<1>と<2>）とその隣の何も無いパート（パート<3>）を開封（連通）させます（ステップ2）。
- ✓ 使用しない薬剤が入っている部分（パート<1>と<2>）と使用する薬剤が入っている部分（パート<3>）を熱シール法とジッパー構造で切断、密封します（図表4）。

図表4：デザイン例②（ステップ3）

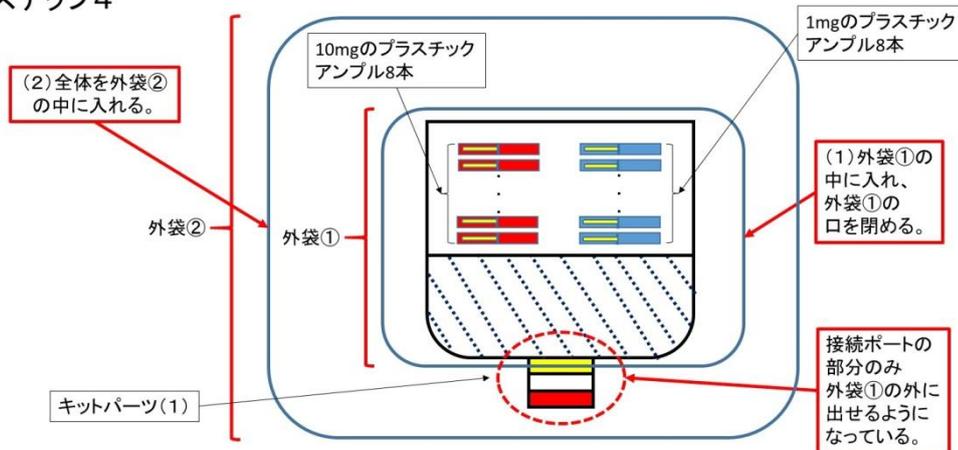


- ✓ 使用する薬剤の入ったキット全体を外袋①の中に入れ、熱シールやジッパー構造等で密封し

ます（図表 5 の（1））。キットのパーツの中で輸液ルートが接続されるポートの部分（キットパーツ（1））は外に出ますが、たとえ、抗がん剤を含む輸液の内容物が熱シールしたキットの部分から漏洩しても外に漏れないような密封構造になっています。そして、更に、外袋①に入ったキット全体を外袋②の中に入れ、熱シールやジッパー構造等で密封します（図表 5 の（2））。

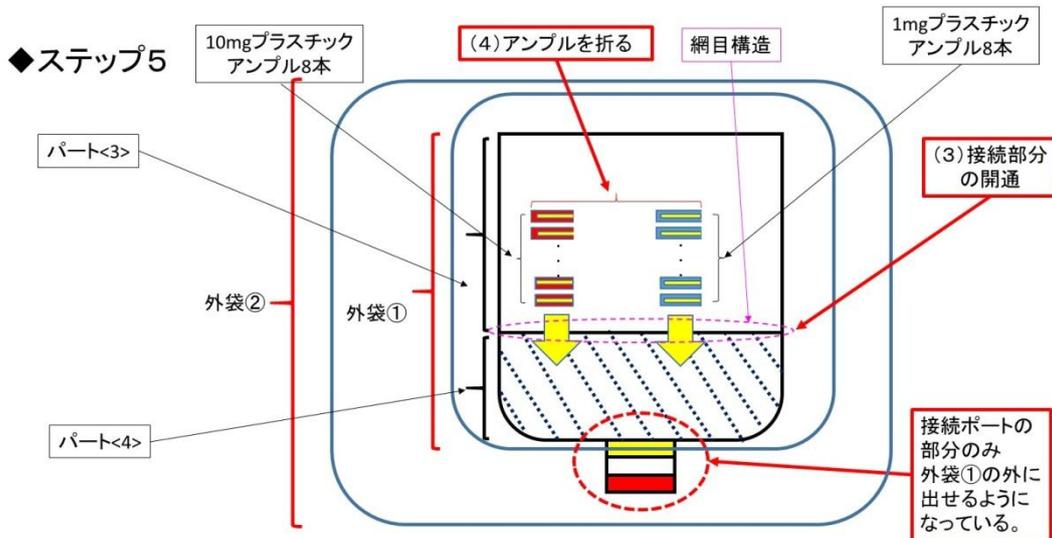
図表 5：デザイン例②（ステップ 4）

◆ステップ4



- ✓ 次に、アンブルが入った部分と輸液が入った部分を連通させます（図表 6 の（3））。そして、アンブルを外から折り、薬剤を輸液に溶解させます（・・・（4））。（3）で連通させた2つの部分（パート）の間には、網目状の構造物があり、輸液は双方を行き来できますが、アンブルの残骸は、元々輸液が入っていた部分（パート<4>）へは入れない構造になっています。薬剤の溶解作業が終わった後、抗がん剤を含む内容物が漏出していないことを確認し、外袋②からキットを含む外袋①を取り出し、病室に払い出しを行います（図表 6 の（4））。

図表 6：デザイン例②（ステップ 5）



以上